『源氏物語』宇治の阿闍梨と横川僧都

――僧の媒介機能による「内部と外部」の生成力学――

増田高士

［キーワード：①宇治の阿闍梨　②横川僧都　③媒介　④内部と外部　⑤骸］

はじめに

『源氏物語』の続篇「宇治十帖」には、そのはじまりに宇治の阿闍梨、終わりに横川僧都という二人の僧が登場する。この両者について、媒介機能という観点から考察する（以下、紛らわしい場合を除き、それぞれを「阿闍梨」、「僧都」と表記する）。宇治の阿闍梨は京と宇治の橋渡しとして機能することで「宇治十帖」の世界をひらく切っ先としてあり、横川僧都は浮舟を宇治から小野に連れていくと同時に、小野（浮舟）と京をつなげる媒介者として、やはり物語空間を切りひらいていくからである。

媒介機能を扱う上で、「内部と外部」という観点を導入しておきたい。「宇治十帖」は、宇治を舞台とする物語であり、京の外部空間として設定されている。[1] しかし、そもそも京にとっての外部として位置付けられてい

くためには、京と宇治が何らかの接点をもたなければならない。というよりも、接点をもつことそれ自体が外部の生成と同時的なのであり、単に物語の舞台が京の周辺に移行したという問題ではない。三田村雅子［一九九六］はこの問題について、宇治という外部は単に京の外側に存在するというのではなく、疎外され、外側に追いやられたものが充満する世界としての外部、そしてその外部が内部を支える論理としてあることを論じている。示唆に富む指摘である。(2)

先行論には、二人の僧の典拠となる人物や仏典に関する指摘、あるいは人物像を考察したものは多々あるが、媒介機能に特化して論じたものは見受けられない。しかし、物語における僧の働きを考える上で、隔たった空間を横断しながら空間や人物関係を接続していく機能を見逃すべきではない。以下、二人の僧が物語にどのように関与し、物語に何をもたらしているのかを考察していく。

一　僧の媒介機能

まず、正篇の僧の役割と特徴を確認しておく。僧の役割は多様であり、加持祈禱を担当する場合も多々あるが、本節では媒介機能という観点から考えたい。(3) 具体的には、「若紫」巻の北山の僧都、「薄雲」巻の夜居の僧都、「夕霧」巻の阿闍梨の三者を例に、媒介者としての働きを確認する。

まず、「若紫」巻の北山の僧都である。源氏が「瘧病（わらはやみ）」となり、「北山」の「なにがし寺」に加持祈禱を受けに赴く（若紫巻①一八三）。そして僧都の僧坊で幼い少女を垣間見する。後の紫の上であるが、源氏はこの少女に衝撃を受ける。注意したいのは、この垣間見の後に源氏が僧都から少女の素性を聞くという展開である。

僧都の妹である尼君の娘と兵部卿宮との間に生まれたのが紫の上であるという系譜の情報によって、源氏は「親王の御筋にて、かの人にもかよひきこえたるにやと、いとどあはれに見まほし」（同一九六）と、紫の上が藤壺と血縁であることを知る。この情報によって、源氏は紫の上を引き取ることを固く決意する。源氏と藤壺、源氏と紫の上という関係は物語にとって重要な意味を持つのであり、後には女三の宮との関係にもかかわってくる。物語の核心部分をなす情報が僧都によって伝達されていることから、情報の媒介機能が確認できる。

次に、「薄雲」巻に登場する夜居の僧都を検討する。「次々の御祈りの師にてさぶらひける僧都、故宮にもいとやむごとなく親しきものにおぼしたりしを…」（薄雲巻③一六九―一七〇）と紹介されている。この僧都は藤壺と源氏の関係、つまり冷泉帝の出生の秘密を明かしてしまう。第一部世界の最大の秘事ともいえる出来事を冷泉帝本人が知るという重要な展開は、夜居の僧都による秘密の暴露がきっかけとなっているのである。

もう一例は「夕霧」巻の阿闍梨である。一条御息所がもののけに悩まされて小野に静養することになり、落葉の宮も一緒に小野に移る。そこに夕霧が訪れることによって、夕霧の恋物語が本格的に始まる。夕霧は落葉の宮に想いを打ち明けて実事のないままに一夜を共にする。問題は、そのことが阿闍梨によって一条御息所の耳に入るという展開である。「日中の御加持果てて、阿闍梨一人とどまりて、なほ陀羅尼読みたまふ」（夕霧巻⑥三〇）とあるように、加持僧として側にいた阿闍梨は、「いと聖だち、すくすくしき律師にて、ゆくりもなく」（同三〇）、夕霧が落葉の宮のもとにいつから通っているのかを質問する。一条御息所はその事実を否定するものの、阿闍梨は確かに夕霧が朝帰りした様子を目撃した弟子がいると、ずけずけと言い放つ。一条御息所はこの新情報に面食らうが、それが事実であったのかもしれないと、阿闍梨の情報を信じてしまう。

「夕霧」巻では、阿闍梨の情報が誤解をともなって伝達されている。また、阿闍梨の発言によれば、情報の

出所は「この法師ばらなむ、大将殿の出でたまふなりけりと、昨夜も御車も返してとまりたまひにけると、口々に申しつる」（同三一）というように、弟子たちの目撃談が根拠になっている。僧たちの情報ネットワークが物語を動かしていることが表面化している箇所である点にも注意しておきたい。

以上、三例をもとに、僧による情報の媒介機能を確認したが、いずれも物語を動かすために重要な情報が僧から他の作中人物に伝達されていることが確認できる。「若紫」巻では紫の上が僧都の身内ということもあるが、「薄雲」巻の例は僧という立場だからこそ知り得た秘密でもあり、「夕霧」巻も一条御息所の加持祈禱を担っていた僧だからこそ情報の媒介が可能であった。僧はその活動範囲や人物とのつながりが一般の女房たちとは異なっており、それゆえに、僧にしか知り得ない情報を僧独自のルートで媒介することによって、物語を動かしているのである。

加えて、僧たち本人には情報の伝達がどのような結果をもたらすのか意識されておらず、つい口をついて出てしまった情報や、よかれと思って伝えた情報が物語を動かすという特徴がある。アイロニカルな媒介機能であるがゆえに物語を推進させる力学として必要不可欠なのであろう。そして、以上のような機能は宇治の阿闍梨や横川僧都にも活かされていると考えられる。

二　薫と宇治を媒介する阿闍梨

以下、宇治の阿闍梨について考察していく。阿闍梨は一見目立たないようにみえるが、実は多くの巻に登場する。巻名を列挙すると「橋姫」巻、「椎本」巻、「総角」巻、「早蕨」巻、「宿木」巻、「蜻蛉」巻、「手習」巻

である。

阿闍梨に関する先行論も確認しておく。阿闍梨の行動原理については、原岡文子［二〇〇三］、中哲裕［二〇〇五］が源信の『往生要集』を典拠として、八の宮に対する阿闍梨の仏教的な言動を分析している。また、阿闍梨の人物論的な分析もある。たとえば鈴木裕子［一九九九］は阿闍梨の行動原理に女人の罪障深さからくる姉妹への排除と八の宮を往生させたいという「欲望」が潜んでいると指摘する。一方、小西真智子［一九七八］は中の君と阿闍梨の贈答歌を分析して、阿闍梨の中の君に対する思いやりのまなざしを読み取る。先行論のアプローチは阿闍梨の行動原理を仏典に求めるものや、阿闍梨の内面、あるいは人物像を論じたものに整理できる。

本稿では先行論を参照しつつも、媒介機能という視角にこだわる。まず本節では、薫と宇治とを媒介する阿闍梨について考察する。実は、阿闍梨の媒介機能を指摘すること自体は目新しいものではない。阿闍梨が八の宮と薫の橋渡しをしたというのはすでに原岡文子［二〇〇三］や三角洋一［二〇一一］によって指摘されており、物語を読めば自明のことでもある。しかし、阿闍梨が薫と宇治を結びつけたと指摘するだけでは不十分であり、その接続の意義について、より追求した考察が必要である。

以下、具体的には、阿闍梨が薫と八の宮を媒介する点、薫に宇治の姉妹に関する情報を伝える点、薫の垣間見に間接的に関与している点の三点について確認しておきたい。その上で、薫にとって宇治とは何かを考えてみたい。

宇治の阿闍梨は「橋姫」巻の序盤で初登場する際、次のように紹介される。

この宇治山に、聖だちたる阿闍梨住みけり。才いとかしこくて、世のおぼえも軽からねど、をさをさ公

事にも出でつかへず籠りゐたるに、この宮の、かく近きほどに住みたまひて、さびしき御さまに、尊きわざをせさせたまひつつ、法門を読みならひたまへば、尊がりきこえて、常に参る。（橋姫巻⑥二六四）

阿闍梨は朝廷の法要にも滅多に顔を出すことなく宇治山に籠っていたが、傍線部のように、八の宮と出会うことで仏道を介して親交を深めていく。

阿闍梨は「冷泉院にも親しくさぶらひて、御経など教へきこゆる人なりけり」（橋姫巻⑥二六五）とあるように、冷泉院とも親交があり、「八の宮の…〔中略〕…心深く思ひすましたまへるほど、まことの聖のおきてになむ見えたまふ」（同二六五）と、冷泉院に八の宮のことを伝える。薫もそこに居合わせていたことから、八の宮の情報は冷泉院のみならず、薫にも伝わるのである。八の宮が「俗聖」（同二六五）であることに薫は関心をもつ。

さらに阿闍梨は姫君たちの情報も提供する。阿闍梨は「ものの音めづる阿闍梨」（同二六六）といわれており、姫君たちの演奏の素晴らしさを褒め称える。この場面で姫君たちの情報が薫に伝えられている点がとくに重要である。

そして、京から帰った阿闍梨は八の宮のもとへ向かい、冷泉院の手紙、そして薫のことを伝える。八の宮は薫のことを「心はづかしげなる法の友」（同二六九）と評しているように、仏道を介して二人の親交が深められていく。京と宇治とを連結させ、物語がひらかれていく切っ先に位置するのが宇治の阿闍梨なのである。

薫が宇治に通うようになって三年が経過し、その年の晩秋にも薫は宇治を訪問する。はじめて薫が姉妹を垣間見するという出来事とかかわる箇所である。この時の八の宮と阿闍梨の動きに注意しておきたい。

秋の末つかた、四季にあててしたまふ御念仏を、この川面は、網代の波も、このころはいとど耳かしか

ましく静かならぬを、とて、かの阿闍梨の住む堂の寺にうつろひたまひて、七日のほど行ひたまふ。姫君たちは、いと心細く、つれづれまさりてながめたまひけるころ、中将の君、久しく参らぬかなと、思ひ出できこえたまひけるままに、有明の月の、まだ夜深くさし出づるほどに出で立ちて、いと忍びて、御供に人などもなくて、やつれておはしけり。

（橋姫巻⑥二七一―二七二）

宇治川の波音の騒がしさのために、八の宮は阿闍梨の住む寺に移動して勤行に励むことになった。そしてこの八の宮の不在と並行して語られるのが薫の宇治来訪と垣間見なのである。ということは、間接的にではあるが、阿闍梨と八の宮の熱心な仏道修行によって薫の垣間見の条件が整えられたともいえるのであり、アイロニカルな恋の媒介者の役割を果たしていることになる。そもそも、姉妹の情報をはじめて薫の耳に入れたのも阿闍梨であり、薫が姉妹へ急接近していくきっかけに阿闍梨は度々関与しているのである。

さて、ここで薫にとって宇治とは何かという問題を考えておきたい。そもそも薫が宇治に通うことになったきっかけは八の宮の「俗聖」としての生き方に関心を持ったからであるが、そのような道心の根底には自身の出生への疑問がある。それゆえに京での華やかな生活や出世にもあまり関心を示さないという、厭世的な思想に染まっているのである。そのような薫が自身の問題から目を背けるかのように、道心と称して宇治という外部に足を運ぶようになる点をおさえておきたい。

それに加えて、宇治の姉妹についても、京における薫の女性関係との対置として考えたい。というのも、薫は大君に心惹かれていくことになるが、それはたまたま宇治に大君という美女がいたからという単純な話ではない。京での薫の憧憬は女一の宮であるが、正面から女一の宮との恋愛に向き合うことはない。そうかといって「宿木」巻にあるような女二の宮との結婚で満足することもない。一方、性欲を満たすために女房と戯れる

ことは欠かさない薫でもある。そのような対女性関係をふまえる必要があり、京ではくすぶっていた欲望を向ける対象として、外部としての宇治の姉妹を位置付ける必要があると考えられる。

以上のように考えた場合、阿闍梨は物語をひらく切っ先としてあるわけだが、それは単に空間的な接続を意味するのではない。むしろ、薫にとっての宇治とは、薫の内部から発生した外部という意味をもつ。その過程にかかわるのが媒介者としての阿闍梨である点にも留意しておきたい。というのも、この外部生成の過程は薫のみならず、大君にとっての八の宮という問題にも関連するからである。

三　大君と八の宮を隔てる阿闍梨

本節では阿闍梨の媒介機能について、大君と八の宮の関係の変化を軸に考察する。とくに問題としたいのは反媒介ともいえる機能である。具体的には、阿闍梨が八の宮と姉妹を引き離す役割を担っている点を特化して扱う。それに加えて、八の宮が大君の夢にあらわれないこと、大君の死についても考察する。

「橋姫」巻に続く翌年の七月、薫は久しぶりに宇治を訪れる。八の宮は薫に対して、姫君たちの後見を依頼する。そして八の宮は姫君たちにも死後の身の処し方について言い残した後、山寺に籠る。その後、八の宮の具合が悪化し、阿闍梨は付き添って看病する。

阿闍梨つとさぶらひてつかうまつりけり。「はかなき御なやみと見ゆれど、限りのたびにもおはしますらむ。君たちの御こと、何かおぼし嘆くべき。人は皆、御宿世といふもの異々なれば、御心にかかるべきにもおはしまさず」と、いよいよおぼし離れるべきことを聞こえ知らせつつ、「今さらにな出でたまひそ」

と、いさめ申すなりけり。　（椎本巻⑥三二一―三二三）

注意したいのは、阿闍梨が八の宮に姫君たちへの思いを断ち切らせ、下山を諦めさせていることである。阿闍梨は意地悪く父と娘たちを引き離そうというのではなく、あくまで八の宮の極楽往生を考えての制止なのだが、結果的には、皮肉にも阿闍梨が八の宮と娘たちを引き離したまま、八の宮は亡くなってしまう。

さらに、阿闍梨は八の宮の遺体に対面することをも制止する。

阿闍梨、年ごろ契りおきたまひけるままに、後の御こともよろづにつかうまつる。「亡き人になりたまへらむ御さま容貌をだに、今一度見たてまつらむ」とおぼしのたまへど、「今さらに、なでふさることかはべるべき。日ごろも、またあひ見たまふまじきことを聞こえ知らせつれば、今はまして、かたみに御心とどめたまふまじき御心づかひを、ならひたまふべきなり」とのみ聞こゆ。おはしましける御ありさまを聞きたまふにも、阿闍梨のあまりさかしき聖心を、憎くつらしとなむおぼしける。　（椎本巻⑥三二四）

姫君たちは八の宮ともう一度対面したいと望むが、阿闍梨はそれを拒絶する。結局、八の宮と姫君たちの対面は阿闍梨によって阻まれてしまったのであり、八の宮の死に際して、姫君たちを引き離す障壁として機能していることになる。

本稿はこのような言動の根拠を阿闍梨の内面の問題や仏典資料に求めたいのではない。阿闍梨の意図の如何ではなく、反媒介ともいえる機能について考えてみたい。というのも、媒介と反媒介は「内部と外部」という観点からみれば表裏一体の働きだからである。大君にとって、外部の内部化された八の宮という視角から考えてみたい。

大君と中の君にとって、父の臨終に立ち会えなかった意味は重く、今後の身の処し方について、くり返し父

の遺言を反芻することになる。とくに大君は自身と中の君の身の処し方を考える際に、父を遺言という形で内部化することによって、最終的にそれを口実に薫と結ばれることを拒否していく、という物語展開となっている。たとえば「総角」巻で匂宮が宇治へ紅葉狩に行く機会を利用して中の君を訪問する計画が頓挫した時、大君は父の遺言を反芻する。

これこそは、かへすがへす、さる心して世を過ぐせ、とのたまひおきしは、かかることもやあらむのいさめなりけり、…〔中略〕…、やうのものと人笑へなることを添ふるありさまにて、なき御影をさへなやましたてまつらむがいみじさ、なほわれだに、さるもの思ひに沈まず、罪などいと深からぬさきに、いかで亡くなりなむ、とおぼし沈むに、…〔後略〕…。（総角巻⑦八三）

八の宮の死後、大君にとって父は外部としてアクセス不可能な位置におり、父の意志を知る手がかりとなる遺言「おぼろけのよすがならで、人の言にうちなびき、この山里をあくがれたまふな」（椎本巻⑥三一五）といった言葉を内部に抱えることによって、大君の物語がおし進められていく。[4] しかし、八の宮の遺言の示すところが曖昧なこともあり、右のような大君の解釈が生じてくるのである。[5] 大君は父という外部を内部化することによって、その遺言に背く自分を罪深いと自責し、痛めつけ、死を見据えるようになる。このような八の宮という外部の内部化のきっかけを作っているのも阿闍梨の媒介機能なのである。

さらに、以上のことと関連するのが、夢にあらわれる八の宮である。「総角」巻で大君が死を意識し、病床に臥すという物語展開の中で、八の宮が夢にあらわれる箇所が二つある。一度目は中の君の夢であり、二度目は阿闍梨の夢である。一方、大君の夢には八の宮があらわれない。大君については次のようにいわれている。

親のいさめし言の葉も、かへすがへす思ひ出でられたまひて悲しければ、罪深かなる底にはよもしづみ

たまはじ、いづこにもいづこにも、おはすらむ方に迎へたまひてよ、かくいみじくもの思ふ身どもをうち捨てたまひて、夢にだに見えたまはぬよ、と思ひ続けたまふ。（総角巻⑦九三）

〔大君〕「亡せたまひてのち、いかで夢にも見たてまつらむと思ふを、さらにこそ見たてまつらね」とて、…〔後略〕…。（同⑦九四）

八の宮から大君に対して、何の応答もないことが強調されている。[6] 一方、中の君の夢では、八の宮は「いとものおぼしたるけしきにて、このわたりにこそほのめきたまひつれ」（総角巻⑦九四）という様子であり、阿闍梨の夢にも八の宮が現れる。

〔阿闍梨〕「いかなる所におはしますらむ。さりとも涼しき方にぞ、と思ひやりたてまつるを、先つころの夢になむ見えおはしましし。俗の御かたちにて、世の中を深う厭ひ離れしかば、心とまることなかりしを、いささかうち思ひしことに乱れてなむ、ただしばし願ひの所を隔たれるを思ふなむ、いとくやしき、すすむるわざせよ、といとさだかに仰せられしを、…〔中略〕…。さては思うたまへ得たることはべりて、常不軽をなむつかせはべる」など申すに、君もいみじう泣きたまふ。…〔中略〕…。いかで、かのまだ定まりたまはざらむさきにまでて、同じ所にも、と聞き臥したまへり。（総角巻⑦一〇一―一〇二）

阿闍梨の説明によれば、一つ目の傍線部のように、八の宮はいささか気にかかることがあって極楽往生できていないという。それは娘たちのことが原因と考えられる。それに対して阿闍梨は二つ目の傍線部のように「常不軽」を行う。阿闍梨が八の宮の往生を生前からよく気にかけていたことをふまえると、「常不軽」は往生していない八の宮を諫め、しっかりと往生させるための行と考えられる。[7]

これはあの世とこの世をつなぐ阿闍梨の媒介機能ともいえるが、大君にとっては、八の宮が往生できていな

い事実にショックを与えられると同時に、自分には父から何の応答もないことを突きつけられるという結果でもある。八の宮の死後、物語は徹底して八の宮を大君の外部に置くことにこだわっている。

薫と大君の死別にもふれておきたいが、先行論にすぐれた分析がある。神田龍身［一九九二］による「死別により二人の愛は永遠化された」という指摘、三田村雅子［一九九六］による「大君はついに「隔て」の向こう側の存在、薫の〈外部〉でありぬくことによって、薫の永遠の思慕と憧憬を手に入れている」との指摘である。薫にとって、大君は死別によって永久に外部化されたわけだが、いいかえれば、大君は薫の中に永遠の女性として内部化されることに成功したともいえる。それが薫の「骸」への執着を形成していくのであるが、詳しくは第五節で述べる。

以上のように、「宇治十帖」は「内部と外部」の生成力学によって物語をおし進めている。薫にとっては内部の外部化である宇治、大君にとっては外部の内部化である父と自らの死、その先にある薫と大君の死別に、阿闍梨の媒介機能が深くかかわっており、物語をおし進める力学たりえている。また、その媒介機能とはアイロニカルなものである。薫と宇治を結びつけたのは仏道であり、恋愛とは無縁の契機が結果的には薫と大君の接点をもたらした。さらには、八の宮の往生を願うがゆえに姉妹と八の宮が隔てられ、父が大君の外部として徹底されることによってその後の物語展開を促している。このような媒介機能は正篇の僧の機能をふまえながらも、より物語展開に食い込ませる形で方法化したものといえる。後述するが、以上は横川僧都にも共通する機能である。

四　孤独の指標としての阿闍梨

大君を失った中の君についても、宇治の阿闍梨との関連を考えてみたい。「早蕨」巻でひとり残された身の上を中の君に実感させ、中の君の物語として切り替わる節目にも阿闍梨が関与しているからである。

「早蕨」巻の冒頭、阿闍梨から見舞いがあり、中の君は新春の贈答をする。阿闍梨の見舞いは「椎本」巻にもあった。八の宮が亡くなった春に「聖の坊より、「雪消えに摘みてはべるなり」とて、沢の芹、蕨など奉りたり」（椎本巻⑥三四六）とあり、時節の見舞いが届く。この時、中の君と大君は父を偲んで歌を詠み交わしている。

〔大君〕君がをる峰の蕨と見ましかば知られやせまし春のしるしも

〔中の君〕雪ふかき汀の小芹誰がために摘みかはやさん親なしにして　（椎本巻⑥三四六）

大君の歌は、「父が存命で折り取った峰の蕨であったなら、春の訪れたしるしとも頷けるのに」の意である。中の君の歌は姉に同調しながら、「雪深い小芹を誰のために摘み取って楽しめるのだろうか、親もいないのに」の意である。これらの見舞いの品について小町谷照彦［一九八四］は「蕨・芹・土筆などは宇治よりもさらに奥深い山を表現する景物であり、亡き八の宮とかかわり深い阿闍梨が姫君たちとかかわりを持ち、故人を偲び合う媒体となっている」と指摘するが、さらにいえば阿闍梨自身がその媒体なのではないか。

一年後の「早蕨」巻の冒頭では、独り残された中の君に同じ春がめぐってくるという場面であり、阿闍梨から見舞いが届く。

阿闍梨のもとより、「年あらたまりては、何ごとかおはしますらむ。御いのり祈禱はたゆみなく仕うまつりはべり。今は、一ところの御事をなむ、やすからず念じきこえさする」など聞こえて、蕨、つくづくしをかしき籠に入れて、「これは童べの供養してはべる初穂なり」とて奉れり。手はいとあしうて、歌はわざとがましくひき放ちてぞ書きたる。

「君にとてあまたの春をつみしかば常を忘れぬ初蕨なり

御前に詠み申さしめたまへ」とあり。…〔中略〕…、返り事書かせたまふ。

この春はたれにか見せむなき人のかたみにつめる峰の早蕨　（早蕨巻⑦一二五―一二七）

見舞いの品物は「蕨、つくづくし」、すなわち「蕨」と「つくし（土筆）」である。蕨は巻名でもある重要語だが、注意したいのは、「椎本」巻で大君が蕨を和歌に詠み込んでいた点である。大君は、もし父が折り取った蕨であったならと詠んでいたわけだが、「早蕨」巻ではその歌を詠んだ大君さえもが不在となってしまった。それを強調するように、「蕨、つくづくしをかしき籠に入れて…」とあり、阿闍梨の和歌にも「蕨」が詠まれている。中の君の和歌にもある通り、もはや誰に見せてよいのかもわからない、形見としての「蕨」である。

中の君にとって、阿闍梨との贈答が大君の死をまざまざと実感させる指標となっている点は重要であろう。それは父と姉がもはやアクセス不能の外部に隔たってしまったこと意味するからである。大君の生前には、大君と中の君が独立して物語内を動くことは稀であったが、「早蕨」巻以降は大君の死という外部化によって中の君の物語が独立して動き出すことになる。そのような物語展開の節目に弾みをつける役割を阿闍梨が担っているのである。

五　薫の欲望構造と阿闍梨

ここで、薫にとって大君とは何かという問題を考えておきたい。これは浮舟と横川僧都に関連すると考えられるからである。薫は大君との死別によって永遠に隔てられることで、大君を永遠の憧憬対象として内面化しえたことはすでに述べた。

これと関わるのが薫にとっての「骸（から）」、つまり遺体の問題である。薫の「骸」へのこだわりは度々言及される。大君が亡くなった場面では、その死体をまじまじと見ながら、奇妙にもエロスを感じる薫の姿が描かれている。そして薫は、大君を「虫の殻のやうにても見るわざならましかば」（総角巻⑦一一〇）と思う。周囲の人々が薫を話題にする時にも、「中納言殿の、骸をだにとどめて見たてまつるものならましかばと、朝夕に恋ひきこえたまふめるに」（早蕨巻⑦一二七）と、大君の「骸」へのこだわりが強調されている。

実は薫が匂宮を中の君のもとに導く場面で、薫自身は大君と対面し、男女の関係を結ぼうと試みれば可能であった場面がある（総角巻⑦五〇―五三）。しかし、薫はそれを放棄することで大君との「へだて」を保ったまま大君と死別したのであった。そもそも薫は京の女性から目を背ける形で宇治へ向かったわけだが、大君と結ばれないままの死別もその延長にあるのではないか。中心から目を逸らし、より周縁へ、より外部へと、自身の欲望を向ける対象を求めてさまようのが薫である。そして薫は大君が自分を好いているという自覚があるからこそ、目の前の大君にも正面から向き合うのではなく、肉体だけがあって魂の宿らないもの、つまり遺体こそが自身の愛を最大限に発揮できる究極の媒体であるとして、死別を受け入れたのではないか。

では、阿闍梨は薫とどのようにかかわるのか。大君の死後、「宿木」巻で薫は阿闍梨に対して、八の宮邸の今後の扱いについて語る。「なほ寝殿を失ひて、異ざまにも造りかへむの心にてなむ」（宿木巻⑦二二八）とあり、阿闍梨の寺の近くに堂を建てるというわけだが、この時に阿闍梨が引き合いに出す話に注意したい。「昔、別れを悲しびて、屍を包みてあまたの年頸に掛けてはべりける人も、仏の御方便にてなむ、かの屍の嚢を捨てて、つひに聖の道にも入りはべりにける」（同二二八）と、愛する人を失った人がその屍に長年こだわっていた例を出す。諸注釈でも典拠は不明とされている箇所であるが、重要なのは薫がいまだに大君の「骸」にこだわっていることを阿闍梨がすっぱ抜いており、その執着を捨てるべきであると主張している点である。

しかし、薫は阿闍梨の話のように、「骸」への執着を捨てられるわけではない。むしろ、浮舟の存在を知ることによって、大君の代わりに「昔おぼゆる人形（ひとがた）」（同二二一）としての浮舟を求めるようになる。そして、薫の「骸」へのこだわりは浮舟の失踪後も意識されている。「蜻蛉」巻では浮舟の遺体がないことが度々強調されており、薫自身も「骸をだに尋ねず、あさましくてもやみぬるかな」（蜻蛉巻⑧一三五）というように、「骸」への執心があらわれている。

このような薫に対しても阿闍梨はかかわっている。浮舟の失踪後、本文に「阿闍梨は、いまは律師なりけり。召して、この法事のことおきてさせたまふ」（同一三五）とあり、「四十九日のわざ」を「かの律師の寺にてなむせさせたまひける」（同一四〇）とある。浮舟の四十九日の法要を執り行ったのは律師となった阿闍梨なのである。なおかつ、「手習」巻では小野を訪ねてきた紀伊の守の発言にみえるように、一周忌の法要にも阿闍梨がかかわっている。

〔紀伊の守〕「…〔前略〕…。故宮の御女に通ひたまひしを、まづ一所は一年亡せたまひにき。その御おと

うと、またしのびてすゑたてまつりたまへりけるを、去年の春また亡せたまひにければ、その御果てのわざせさせたまはむこと、かの寺の律師になむ、さるべきことのたまはせて、…〔後略〕…」

（手習巻⑧二四五）

浮舟の一周忌を営むのも阿闍梨である。阿闍梨はアイロニカルな媒介機能として「骸」への執着の原因ともなっていたのであるが、大君の死後は薫の執着を鎮めようとする役割を果たそうとしているのであろう。

たしかに、浮舟の「骸」がないことは薫にとって、くすぶる欲望を不発に終わらせる一つの契機たりえている。大君の「人形」としての浮舟であり、さらにはその「骸」さえもないことで、薫の欲望は機能不全に陥るしかない。物語が「蜻蛉」巻で終わるのならば、薫の欲望は不発弾のまま放置され、徐々に沈静化されていくのかもしれない。

しかし、物語は横川僧都というもう一人の媒介機能を用いて浮舟の生存情報を薫にもたらすことによって、薫の欲望は再燃せざるをえない。また、僧都は浮舟にとっての小野という外部を生成する媒介の役割も果たす。以上の点を次節以降で詳しく扱う。

六　浮舟と小野を媒介する僧都

本節では僧の媒介機能をふまえて、横川僧都が浮舟と小野を接続したことの意味、つまり浮舟にとっての小野とは何かを考察する。僧都についての先行論は多々ある。主には人物像を分析した論考、源信をモデルと指摘する論考、「夢浮橋」巻の手紙が還俗を勧奨しているのか否かという解釈をめぐる議論があり、稿者も増田

高士［二〇二三］において、僧都に関する先行論を整理しながら手紙の重要性を考察したことがある。(8)

一方、僧都の媒介機能については、これまであまり言及されていないように見受けられる。媒介機能は物語を読めば自明のことではある。しかし、宇治の阿闍梨との対応関係を考えることで、「宇治十帖」全体を通底する問題として考察したい。

まず、物語の流れを確認しておく。僧都は「手習」巻の冒頭に、「そのころ、横川に、なにがし僧都とかいひて、いと尊き人住みけり」（手習巻⑧一七三）と紹介される。僧都には「八十あまりの母」と「五十ばかりの妹尼」がいたが、阿闍梨が付き添っての初瀬詣の帰りに母親の具合が悪くなり、「宇治のわたりに知りたりける人の家」で休むことになる（同一七三）。僧都は山籠りしていたが、母親を心配して下山することになる。その際、僧都たちは生死の境をさまよう浮舟を発見することになる。

発見した浮舟を助けるという判断を下すのは僧都である。僧都は「その命絶えぬを見る見る捨てむこと、いみじきことなり」（同一七八）と言い、浮舟を介抱する。その後、浮舟は僧都たちによって小野に連れて来られ、僧都の決死の修法によって病状が回復する。浮舟にとっては死の淵から生の世界への横断、そして宇治から小野という空間の横断がなされたわけだが、それは僧都の媒介機能によるところが大きいのである。浮舟にとって、小野という外部空間を切りひらいたのは僧都であり、これは宇治の阿闍梨が薫を宇治の世界へ結びつけたのと同様の働きといえる。

一方、小野という外部が浮舟にとってどのようなものであったかについても考える必要がある。浮舟は一度自死を試みたにもかかわらず生かされたという意識があり、小野という土地では過去とのかかわりを断つことによって、ひっそりと生きることを決意する。しかし、小野の人々は浮舟を放ってはおかない。妹尼は浮舟を

亡き娘の代わりとして珍重し、その娘婿である中将も浮舟に懸想する。妹尼と中将は結託するようにして、自分たちの期待に沿うような関係を浮舟に求める。周囲の老尼君たちもそれに便乗するような言動をみせている。浮舟にとって、小野は決して安住の地ではない。むしろ、これ以上の行くあてがないという状況であるぶん、自死を試みる前よりも追い詰められた状況にあるといえる。

重要なのは、小野での人間関係がたまたまそのようなものであったということではなく、外部としての小野が浮舟の内面の外部化された土地としてあるという点である。というのも、妹尼との関係にしても、浮舟自身の結婚問題、あるいは失踪前に実の母（中将の君）に悩みを打ち明けることがなく関係を断絶してしまったという問題を内包したものといえる。中将との関係にしても、物語が度々強調しているように、薫との関係を浮舟に想起させる存在としてある。母や薫、匂宮との過去の関係が、妹尼や中将を通して再度表面化してくるのであり、たまたま小野でも同じことが起こったという問題ではない。浮舟の内部の問題が外部化したものが小野であり、それは薫が内面の外部化として宇治に通うことになったことと対応関係にある。[9] さらにいえば、浮舟にとって、外部としての小野はそれ以上どこにも逃げ場のない、自身を圧迫してくる外部としてあり、浮舟物語は浮舟を中心に据えつつ、より煮詰まった方向に進んでいくのである。

浮舟が選択した逃げ道としての出家について考えてみてもよい。出家を執り行ったのも僧都である。浮舟にとっては周囲との関係を断ち、これ以上自分に構ってほしくないという意図で敢行した出家である。しかし、結果としては中将を遠ざける効果はなく、「夢浮橋」巻では、還俗を勧奨するとも取れるような手紙が僧都から浮舟宛に届くことになる。僧都は浮舟と外部（小野の人々）との関係を変えうるきっかけ（出家）を与えているようにみえて、その実、浮舟にとっては皮肉な結果しかもたらしていない。

このような機能は宇治の阿闍梨と通じるものがある。阿闍梨は八の宮の往生を叶えることが行動原理だったように、僧都にとっても浮舟の生を願って助け、浮舟の安穏を願って出家させるという行動原理が読み取れるものの、それがアイロニカルにも浮舟本人を追い詰める結果を生んでしまうのである。

七　浮舟と薫を媒介する僧都

横川僧都の媒介機能について、よりスケールの大きな働きを考えておきたい。僧都が女一の宮の病の祈禱を行うために下山した際、明石中宮に浮舟の情報を流してしまう箇所である。「宇治―横川―小野―京」という空間の横断はこれまで登場してきた僧の中でも随一のスケールの大きさと考えられるが、それゆえに、浮舟にとっては外部が拡大することであり、同時に薫にとっては「骸」への執着を再燃させることでもある。

女一の宮が回復した後、中宮が僧都を「夜居にさぶらはせたまふ」とあり、しばらく語らった後に僧都はその「ついで」に、「いとあやしく稀有のことをなむ見たまへし…」と、浮舟を発見してからの出来事を事細かに中宮に説明する（手習巻⑧二三三―二三四）。また、浮舟が出家したこと、妹尼が浮舟を「亡せにし女子の代りに」していることも話してしまい、「ものよく言う僧都」と評されてしまう始末なのである（同二三三―二三四）。

中宮はすでに宇治で女性が行方不明になったことを聞き知っており、その情報と照らし合わせて、話題の女性が浮舟であることを推測する。中宮はこの情報を薫だけには伝えておくべきと判断し、薫も浮舟の居所を知ることになる。そして薫は自ら横川に赴き、僧都と対面して浮舟への仲介を依頼する。僧都は浮舟と薫の関係

を知って衝撃を受け、曖昧な内容の手紙を小野に送る。

このような展開が浮舟と薫の両者にとって意味するところを考えたい。浮舟にとっては外部が拡大することであるが、重要なのはその外部が浮舟本人の根本的な問題そのものの回帰であるという点である。切り捨てようとした過去が、薫との再会という可能性を皮切りに再び迫ってくる可能性が急激に高まったことをあらわしており、それは浮舟にとって、より深刻な内部の問題そのものとしての外部なのである。それゆえに僧都には「宇治―横川―小野―京」という、よりスケールの大きな媒介機能が必要とされたのではないか。僧都の媒介機能は浮舟にとってどこにも逃げ場のない外部、内部の回帰としての外部を生成する過程と対応関係にあると考えられるのである。

そして、薫にとってこの展開が意味するものは何か。薫にとっても小野（浮舟）という外部が生成される道がひらかれたことになるが、それは一言でいえば、「骸」への執着にあらわれているような欲望の再燃である。浮舟の「骸」がないことによって、また、阿闍梨の営む法要によって、薫の執心はなだめられ、ゆるやかに静まっていくように思われていたのだが、浮舟の生存を知るということは大君の「人形」である浮舟への欲望を再燃させることなのである。そのような意味で、物語は「宇治十帖」の序盤で阿闍梨の媒介機能を契機に形成した薫の欲望を、僧都によって再び問題化しているのである。薫にとって、「殻」さえもない浮舟ではいけないのであって、大君の「人形」としての浮舟は絶対手元に置いておかなければならない。「夢浮橋」巻では、薫と浮舟の再会までは描かれていないが、それは語るまでもなく、薫の欲望を再燃させる過程を語ることによって自然と想起される展開ということになる。

「宇治十帖」のはじまりにおいて、阿闍梨の媒介機能は薫と宇治の接続を果たしたが、大君の死後、浮舟の

失踪と「骸」の散逸によって薫の欲望は不発に終わり沈静化するように思われた。しかし、僧都の媒介機能がそれを再燃させることによって、一貫して薫を終わりなき大君思慕という迷妄の道へと彷徨わせる。阿闍梨と僧都のアイロニカルな媒介機能は「宇治十帖」全体を支える力学といえるのである。

おわりに

最後に、媒介機能と「内部と外部」という問題について、「宇治十帖」を扱った他の論考との関連性を述べておきたい。

まず、「内部と外部」は「へだて」と「しるべ」の議論にかかわる。「宇治十帖」は空間的に京から隔たっているというだけでなく、「へだて」や「しるべ」という語が代表するように、多様な隔てと仲介役を駆使して物語をおし進めていくことは先学の指摘にある通りである。室内の物による「へだて」が「間柄の問題」であると指摘した末沢明子［一九九三］や、「へだて」としての宇治川に注目した安藤徹［一九九三］、自然の「へだて」として霧に注目した三田村雅子［一九九六］がある。また、これらの論をうけて鈴木淑子［二〇〇五］は大君と薫、中の君と匂宮、浮舟のそれぞれについて「へだて」を論じている。

また、「しるべ」についても、先の三田村論文に指摘がある。「宇治十帖」には多くの「しるべ」が登場するが、それは単に行動の主体ではないことを示すのではなく、むしろ「しるべ」こそが主体として動く物語としてある。男女関係における仲介役の女房を扱ったものとして齋木泰孝［一九九六］の論考があるが、男女関係に限らずとも、薫と自身の過去を接続する弁、「東屋」巻で浮舟の結婚騒動に絡む仲人、「手習」巻で匂宮を宇

治へ手引きする「しるべ」の内記等、仲介のバリエーションは多様である。なにより、主人公の薫自身も匂宮と中の君の「しるべ」として振る舞うのであり、「宇治十帖」は「しるべ」こそが主体といわんばかりに跋扈する物語としてある。

そのような物語において、阿闍梨と僧都の媒介機能は隔たった空間を接続するというスケールの大きなものであること、そして僧独自の行動原理によって媒介がアイロニカルに機能してしまうことが最大の特徴といえるだろう。それは物語の表層と深層を深く結びつけているのである。

注

（1）新たな物語の舞台がなぜ宇治なのかという点も重要な課題である。近年の歴史学の研究成果として、稗田尚人［二〇一六］は宇治を道長の政治的戦略による別業経営と指摘している。物語と直接かかわらせるには慎重でありたいが、宇治を単なる周縁と位置付ける考え方を修正する上で示唆に富む論考である。

（2）媒介とは、すでにあるAとBを接続するだけではなく、AにとってのB（あるいはBにとってのA）という関係性の発生過程そのものとしてある。それを「内部と外部」という観点で考えるならば、外部とはそれ自体が独立して外側に位置するものではなく、内部との関係において生成された外部としてあることになる。安藤徹［一九九三］が鋭く指摘するように、重要なのは「隔てることと繋ぐことは、どちらが先か後かということではなく、同時的に表裏の関係」にあるということである。このような問題を物語論として考える上で、〈異人〉の創出のメカニズムを論じる赤坂憲雄［一九九二］も参考になった。

（3）作中の僧の役割をわかりやすく整理したものとして中哲裕［二〇〇五］がある。

（4）内部化された父に関する箇所は、以下の記述にも見受けられる。❶［大君］「…何ごとにも後れそめにけるうちに、こののたまふめる筋は、いにしへも、さらにかけて、とあらばかからばなど、行く末のあらましごとにとりまぜての

たまひ置くこともなかりしかば…」（総角巻⑦一三―一四）、❷今はとて山に登りたまひし夕べの御さまなど、ただ今のここちして、いみじく恋しく悲しくおぼえたまふ（同三九）、❸〔匂宮のことを〕あだめきたまへるやうに、故宮も聞き伝へたまひて、かやうに気近きほどまでは、おぼし寄らざりしものを…（同八一）、❹〔大君〕「…亡き人の御いさめはかかることにこそ、と見はべるばかりなむ、いとほしかりける」とて…（同八九）。

（5）匂宮について、八の宮の評価はたしかに低い。「わざと懸想だちてももてなさじ。なかなか心ときめきにもなりぬべし。いと好きたまへる親王なれば…」（椎本巻⑥三一一）との発言があり、中の君には社交辞令程度の文通にとどめておくように助言している。しかし、本当に匂宮との結婚を認めないのならば、文通をさせない等の対応をするのではないか。つまり八の宮は匂宮との結婚を全く認めないというわけではないと考えられる。

（6）大君の夢に八の宮があらわれないことについては笹生美貴子［二〇二三］の指摘があり参考になったが、本稿では「内部と外部」という問題意識によって考察した。

（7）常不軽は先行論にも指摘がある。原岡文子［二〇〇三］は『往生要集』的な修道によって終に救いを得られなかった八の宮に対して、法の師たる阿闍梨が、その反省、対策を常不軽に選び取ることによって、常不軽をめぐるその信仰の在り方の積極性が評価されている」と指摘する。原岡論文に対して、佐藤勢紀子［二〇〇八］は常不軽が在家菩薩にふさわしい行としてあることに注目し、阿闍梨から八の宮へ手向けられた行であると指摘する。

（8）僧都の手紙が還俗を勧奨しているのか否かについては多様な見解があるが、極めて妥当な見解として今井久代［二〇〇二］の指摘がある。今井論文は「薫との縁に従うことで還俗などといった御仏の救いを頼み得ぬ事態に至るのも覚悟しつつ、薫のもとへ戻り無量の仏の救いを「なほ頼ませたまへ」と語った手紙」と指摘する。

（9）鷲山茂雄［二〇〇六］は浮舟が小野の人々という周囲を映し出す鏡と指摘しており首肯されるが、それは「内部と外部」という観点からいえば、周囲も浮舟の内面を映し出す鏡であると考えることができる。

※『源氏物語』の本文は『新潮日本古典集成』（新潮社）により、巻名、冊数、頁数を付した。適宜、表記を改め、傍線等を付した箇所がある。

参考文献

赤坂憲雄［一九九二］『異人論序説』（ちくま学芸文庫）筑摩書房
安藤徹［一九九三］「橋・峠・川・水―空間を繋ぐ―」物語研究会（編）『物語とメディア　新物語研究1』有精堂
今井久代［二〇〇二］「横川の僧都の人間像をめぐって―「さりとて雲、霞をやは」を生きる者―」『国語と国文学』七九―五　東京大学国語国文学会　二〇〇二年五月
神田龍身［一九九二］「分身、差異への欲望―『源氏物語』「宇治十帖」―」『物語文学、その解体―『源氏物語』「宇治十帖」以降―』第一部Ⅰ章　有精堂　↑初出一九八八年十二月
小西真智子［一九七八］「宇治阿闍梨について―宇治阿闍梨と中君との贈答歌をめぐって―」『岡大国文論稿』六　岡山大学法文学部国語国文学研究室　一九七八年三月
小町谷照彦［一九八四］「大君物語の始発―「橋姫」「椎本」の展開」『源氏物語の歌ことば表現』東京大学出版会　一九八四年
齋木泰孝［一九九六］「男主人公と仲介者の役割―長編物語展開の一技法―」『物語文学の方法と注釈』第一編第三章第一節　和泉書院　↑初出一九九二年二月
笹生美貴子［二〇〇三］「「夢」が見られない大君―宇治十帖の父・娘を導くもの―」『源氏物語夢見論』第Ⅲ部第四章　文学通信　↑初出二〇〇八年九月
佐藤勢紀子［二〇〇八］「不軽行はなぜ行なわれたか―宇治十帖に見る在家菩薩の思想―」『日本文学』五七―五　日本文学協会　二〇〇八年五月
末沢明子［一九九三］「住居・隔てもの・調度―源氏物語における飾りと隔て―」物語研究会（編）『物語とメディア　新物語研究1』有精堂
鈴木裕子［一九九九］「宇治八の宮の「死霊」をめぐって―大君を追いつめたもの、そして阿闍梨の「欲望」―」『日本文学』四八―五　日本文学協会　一九九九年五月
鈴木淑子［二〇〇五］「ことばの連鎖と交響「へだて」を中心に」関根賢司（編）『源氏物語　宇治十帖の企て』おうふう

中哲裕［二〇〇五］『源氏物語』における出家者の役割」鈴木一雄（監）・三角洋一（編）『源氏物語の鑑賞と基礎知識　三九　早蕨』至文堂　二〇〇五年四月
原岡文子［二〇〇三］「宇治の阿闍梨と八の宮―道心の糸―」『源氏物語の人物と表現　その両義的展開』翰林書房　二〇〇三年　↑初出一九七三年六月
稗田尚人［二〇一六］「藤原道長の別業経営と宇治別業・桂別業の歴史的位置づけ」『歴史文化社会論講座紀要』一三　京都大学大学院人間・環境学研究科歴史文化社会論講座　二〇一六年二月
増田高士［二〇二三］「『源氏物語』「夢浮橋」巻の手紙と物語の終わり―横川僧都と薫の手紙について―」『学習院大学国語国文学会誌』六六　学習院大学文学部国語国文学会　二〇二三年三月
三角洋一［二〇一一］「橋姫巻の前半を読む」『中古文学研究叢書8　宇治十帖と仏教』Ⅲ―14　若草書房　↑初出二〇〇七年六月
三田村雅子［一九九六］「宇治十帖、その内部と外部」『岩波講座　日本文学史　第3巻　一一・一二世紀の文学』岩波書店
鷲山茂雄［二〇〇六］「横川僧都と小野の人々―宇治十帖主題論拾遺―」『源氏物語の語りと主題』第四章第六節　武蔵野書院　↑初出一九九二年

“In The Tale of Genji, The Ajari of Uji and The Yogawa Monk
—The Generative Dynamics of “Inside and Outside” through the Mediating Function of the Monks—”

MASUDA, Takashi

The subjects of this study are the Ajari of Uji and the Yogawa monk in the Ten Uji Chapters of The Tale of Genji. In particular, the mediating function of the two monks in the tale will be examined. In considering the mediating function, it is important to consider the perspective of “inside and outside”.

The Ajari of Uji fulfills the function of bringing Uji and Kaoru together. It is important to note that Uji is “outside as inside” for Kaoru. Kaoru is unable to establish a deep romantic relationship with the female the First Prcisess in Kyoto, and he turns his desires toward the great lord of Uji as a means of escaping to Uji. It is the Ajari of Uji who performs the mediating function that brings the internal problems to light. This cascades into the issue of the father for the Oigimi and the Oigimi for the Nakanokimi.

After the death of the lord, Ajari advises Kaoru to quell his attachment to the lord, but Kaoru’s attachment shifts to Ukifune. However, Ukifune also disappears, and the funeral is held without even her body. This could have calmed down Kaoru’s obsession, but the appearance of the Yokogawa monk brought information of Ukifune’s survival to the capital. Kaoru’s desire for Ukifune is rekindled when he learns this information. The Ajari of Uji and the Yokogawa monk are the driving force that consistently propels the story forward while fulfilling an intermediary function at the beginning and end of “Ten Uji Chapters”.

（日本語日本文学専攻　博士後期課程三年）